

## サロベツにおけるガン類と保全上の課題

長谷部真 (NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

北海道北部に位置するサロベツ湿原周辺には大きく分けて5つ(大沼:稚内市、兜沼:豊富町、泥炭採掘跡地:豊富町、ペンケ沼:豊富町・幌延町、振老沼:天塩町)のガンカモ類の主要な渡りの中継地があります。これらの中継地では春と秋には主にマガン、オオヒシクイが利用するほか、亜種ヒシクイが100羽程度、カリガネが100羽程度、ハクガンが100羽程度、シジュウカラガンが数羽確認されています。

兜沼では春にマガンが13,000羽、オオヒシクイが秋に1,600羽確認されており、その数は増加しています。2021年に\*EAAFに登録された「サロベツ湿原」の泥炭採掘跡地で秋にオオヒシクイが3,000羽、マガンが2,000羽確認されています。ペンケ沼は春にマガンが10,000羽、秋にオオヒシクイが5,000羽確認されており、マガンは減少傾向にオオヒシクイは増加傾向にあります。振老沼では春と秋にマガンが3,000羽、秋にオオヒシクイが1,000羽確認されています。

ペンケ沼は道北最大のガンの渡りの中継地ですが、マガンの減少に伴いその地位は危うくなっています。もともとペンケ沼に流入する大きな河川はありませんでしたが、下エベコロベツ川(1926年)と福永川(1968年)が人工的に接続され、流入河川の流域面積が16倍になり、沼に土砂が堆積するようになりました。その結果沼の面積が1926年の2.5km<sup>2</sup>から2021年の1.1km<sup>2</sup>に減少し、沼が2つに分断され、自然堤防が樹林化しました。ペンケ沼の下エベコロベツ川流入部付周辺にはヘドロが堆積し、2021年9月と11月には12箇所の平均水深が20cm以下となり、沼の一部が干上がることで湿地化や草地化が見受けられました。また、2005年の国土地理院の地形図と比較して上記河川の河口部の先端が南に350m伸び、南岸まで120mの距離になりました。近い将来ペンケ沼は3つに分断される恐れがあり、今後土砂により埋没し、道北地方の主要なガンカモ類の中継地が失われる恐れがあります。私たちは\*\*ガンカモ調査、調査環境の整備、湖面調査、水深調査、水質調査により現状を把握しています。この土砂流入問題の有効な解決策を見出すことは難しいですが、河川切替された下エベコロベツ川をサロベツ川に接続し元の河道に戻すことがガンカモ類の中継地であるペンケ沼の消失を回避するための唯一の根本的な解決方法かもしれません。

サロベツで春の雪解け水による河川の氾濫と牧草地の冠水によって一時的に生み出される湿地は国内で比類のないもので、上流からの栄養分の供給をもたらす、ガン類にとって渡りの休息の場となります。排水路等整備事業により牧草地の水はけは年々よくなっていますが、農家にとっても利点となるよう配慮したうえでこれらの氾濫原を維持することはガン類の春の中継地の環境保全にとって重要です。

\*東アジアオーストラリアフライウェイ

\*\*PCPD(2020-21年)・ほっく一基金(2022年)の助成事業により実施しています。